

現代における女装行動に関する文化心理的考察

国際日本文化研究センター共同研究員 平松 隆 川
佛教大学大学院教育学研究科博士後期課程

社会学、心理学、文化史学など、女装（この場合、広義で男性が女性物の衣服を着ること）に関する研究は、多い。しかし、ほとんどの場合、「服装倒錯」「変身願望」「女性化志向」「衣服における性差のあいまい化」などを、指摘するにとどまる。それは、女装をおこなう者の声をもとにしているのではなく、男らしい男性なら、男らしい衣服を着るということが前提として研究がすすめられているからである。

一般的には、服装において形態上の男女差があらわれたのは、最もはやいヨーロッパでも中世以降とされている。それ以前は、男女とも基本的には筒状の衣服を着ていた。日本においても同様である。日本の衣服（着物）の場合、そこには男女差はない。着物の合わせは男女で同じ。むしろ、柄による違いはあるが、服装における男女差が広がったのは、産業社会化がすすみ、社会的なレベルでの男女の役割分担が浸透することにより、男性はシンプルで地味な、女

性は形も色も華やかという方向に向かっていったからだ。つまり、どのような服を着るかということは、社会や文化と無関係ではられない。にもかかわらず、これまで社会や文化といった外的側面から、また個人の性格特性といった内的側面から総合的におこなわれた研究は、ほとんどない。

本論では、現代における女装行動として、「ギャル男」をあつかう。彼らはなぜ、女の子たちと全く同じファッションをおこなったのか。「ギャル男」を報道したメディアや「ギャル男」の生の声を中心とする言説分析に加え、社会心理的研究の結果を加味することで、現代における女装行動の意味を文化心理的に考えてみたい。

キーワード：女装、異性装、若者、フェミ男、ギャル男、ギャル、渋谷、文化心理

髪は派手に髪染めをおこない、付け毛によって歌舞伎の獅子のよう。顔全体はガングロの黒い肌。口や目の周りだけ白くするバンダメイク。目の周りに、ワンポイントのキラキラしたシールをはりつける。服は、トップス、パンツ、小物にいたるまで、ギャルに人気のブランド「アルパローザ」のハイビスカス柄で派手なアイテムに身を固め、さらに原色または蛍光色のパンツできめる、といった派手な風貌。



出典：Men's Egg (2004.3.)

2004年、渋谷の街に、こんな姿をした男の子がいた。

それより前の渋谷には、髪は茶髪や金髪や白髪で、顔面は真っ黒。しかし、目元は白や青のアイシャドウで縁取られ、唇も白やピンクで大きく塗る。原色や蛍光色の衣服にミニスカート姿で、花魁のような厚底のブーツかサンダルを履いた女の子がいた。

彼女たちは、その風貌から「ガングロ」「マンバ」「アマゾネス」などとよばれていた。そんな女の子に似ていたことから、2004年頃にあらわれた派手な男の子のことを、男性版ヤマンバギャル(日経流通新聞：2004年3月25日)と形容するメディアも少なくなかった。

また、彼らが渋谷センター街を中心としてみかけられたことから、男性向けファッション雑誌『Men's Egg』は「センターGUY(街)」と命名した。

メディアで話題になるにつれ、渋谷を中心としたものにすぎなかった彼らのファッション

は、名古屋、大阪、そして地方都市にいたってみることができるようになる。だが、彼らの姿は個性的であるとか斬新であるという域を超え、多くの者にとっては悪趣味ですらあった。そんな世間の視線が影響してか、彼らのファッションは2004年が終わろうとする頃には、収束に向かっていった。

ファッションは、いつの時代も移り変わり続けるものだ。その意味では、一過性の社会現象だったともいえる。しかし、だからといって、彼らのファッションは文化を対象とする研究として取り上げるには値しないものではない。どんな時代も、ある特定の生活感覚、ある特定の抽象的な「色彩」をもっている。そして、そこにある「感情の構造」がその時代の「文化」なのであり(Williams, R. 1961 *The Long Revolution*, London: Chatto and Windus LTD)。彼らのファッションもまた、1つの文化の実践にほかならない。

ここでは、彼らの外見を分析することで、なぜ彼らはこんなファッションをおこなったのか、その意味について考えてみたい。

「ギャル男」以前のギャル男

男性版ヤマンバギャル、またはセンターGUYとよばれた男の子。ここでは、彼らのことを「ギャル男(ぎゃるお)」とよぼう。彼らの特徴は、奇抜なメイクと女性物の衣服を着たところにある。

だが、女性物の衣服を着たのは、彼らが最初ではない。1994年頃に、女性物のワンサイズ小さな衣服を着たり、スカートをはいたりする男の子がいた。「フェミ男(ふえみお)」である。

最近では「フェミ男」とよばれる男たちが街に溢れている。なで肩、柳腰の細身体形で、ワンサイズ小さい女物の服をま

とう男たちは、どこか頼りなくて女の子的な雰囲気醸し出している

(BART: 1994年11月)

彼らは、フェミニン(女性的)な男の子という意味から、フェミ男とよばれた。『現代用語の基礎知識』には、1995年に初出があるが、そこでは「女の子のような格好の男」と説明されている。

ピアスにペンダントで満身を飾りたて、体の線をくっきりと出すピタピタTシャツや、ちびポロシャツを着て、果てはスカートとハイヒールまではいてしまった
(日経流通新聞: 1996年1月6日)

フェミ男は、ピアスやペンダントなどのアクセサリーを身につけるのは当然のことながら、体の線をくっきりと出すピタピタのTシャツやポロシャツを着て、スカートとハイヒールを履いていた。

たしかに、一見すると女性のような格好だ。

眉を抜いてみたらホントに顔が変わったんでやめられなくなりました。今では基礎化粧品やヘアグッズにもけっこうウルサイです

(チェックメイト: 1997年12月)

女性物の衣服を着るだけではない、身だしなみに高い関心をもち、化粧をする男の子も登場した。しかし、このような装いは大人からみると、ただおしゃれな男の子というだけではすまない。

歌舞伎やタカラヅカが人気を博すように、日本では異性装へのタブー意識は薄い

(日本経済新聞: 1994年10月27日)

社会に役割に絡み取られた男性服の枠から外れること

(毎日新聞: 1995年1月4日)

同性愛者差別に対する抗議

(西日本新聞: 1997年8月7日)

女物の衣服を着る、化粧をする。彼らのファッションは、異性装ではないか。それにはきっと、何らかのメッセージが隠れているのだろう。大人たちは、そう考えた。

だが、男の子たちにとっては、女性物を着たい欲望があったわけでも、女装がしたいわけでもなく、ましてや女性になりたいわけでもない。

グランジとか70'sっぽい格好をしたくても、まだメンズのフレアパンツってあんまり出回ってなかったし、シャツやTシャツもピタピタのほうがいい

(アクロス: 1994年5月号)

ピタピタのTシャツにベルボトム、おへその見える短いトップの70年代ファッションやグランジなどのクラブファッションをしたい男の子。彼らが着たい衣服が、女性物にしかなかった。単純に結論づければそうなる。

矢島誠人らが、フェミ男について社会心理学的な研究を1990年代後半におこなっている(被服行動におけるクロス・セックス化—男性ファッションの女性化の規定因に関する研究—『繊維製品消費科学: 39(11)』)。

それによると、店で男女両方の服が置いてあれば男物か女物を気にせずに購入したいといった「入手のしやすさ」がフェミ男と正に関連し、いかにも男物といった感じの衣服をいやだと思うといった「規範逸脱志向性」は負に関連することが明らかとなっている。このことから、男の子たちがフェミ男として女性物の衣服を着

ることを逸脱とは考えておらず、現実的な衣服の購入状況がフェミ男をつくったといえる。

現実的な衣服の購入状況とは、70年代ファッションやクラブファッションの入手のしやすさである。したがって、これらの衣服が女性物にしかなかったという必然性を考えると、矢島誠人らの研究結果は、当然の結果である。

なお、同時期に土肥伊都子の研究もある（被服行動におけるクロス・セックス化『繊維製品消費科学：39（11）』）。

土肥伊都子は、フェミ男を「女モノの被服だと認識したうえで、男性がそれを外出着としてそれを着ること」というクロス・セックス化現象とみなしている。いや、土肥伊都子だけではなく、先にあげた矢島誠人らも、同様にクロス・セックス化現象を前提している。しかし実際は、フェミ男が女性物の衣服だと認識したうえで、あえて着ているとは考えにくい。どちらかといえば、男性物か女性物かは気にしていない。

しかしなぜ、こんなファッションが流行ったのか。もちろん、ファッションだから火付け役がいるはず。

武田真治やいしだ壱成が、ユニセックスを意識した中性的なファッションを好んで着るようになったのが、「フェミ男」ブームの始まりだ。ふたりの衣装協力をしていた「スーパーラヴァーズ」広報の橋本伸子さんは語る。「体型的に女性っぽいふたりが、女物の服をカッコよく着こなし、女の子が好意的に受け入れたのを見て男の子が飛びついたようです」

（BART：1994年11月）

10代の女性向け雑誌JUNONが主催する、美男子コンテスト「ジュノン・スーパーボーイ・コンテスト」で第2回グランプリだった武田真治。そんな武田真治とともに音楽活動をしてい

た、いしだ壱成。この2人が、女性物の衣服を着だした。武田真治は身長が165cmと、石田壱成とも小柄で細身であったこともあり、男物ではサイズが大きくダボダボとなり、カッコよくない。似合う衣服のサイズという点から女性物を着だしたという。

「男性が女性のような衣服を着ること、男女共用の服を着ること」をユニ・セックスという。じつは、1990年代のフェミ男に関する社会心理学的研究の多くは、フェミ男をあえてユニ・セックスとは異なる概念としてクロス・セックスで説明しようとしていた。それほどに、このフェミ男の登場は衝撃的なものだったのだろう。しかしながら、『BART』の記事に「中性的」とあるように、フェミ男を研究していた大人からはクロス・セックスにみえていても、男の子の意識のうえでは、むしろユニ・セックスに近いものであった。

さて、雑誌JUNONの美男子コンテストでグランプリだった武田真治。そんな彼が着た衣服が、小学校高学年から高校生をターゲットにした女性ブランド「スーパーラヴァーズ」だった。

ただカッコいいだけの男の子なら、芸能人にはたくさんいる。いわば高嶺の花だ。だが、自分が読む雑誌の美男子コンテストという、一般の男の子のなかから選出された男の子は、自分の周りにもいる同世代の等身大の男の子だ。そんな男の子が、自分も好きな衣服を着ている。カッコイイ、しかも、好きなものが同じ。女の子は、それを好意的に受け入れた。そして、女の子が好意的に受け入れたことにより、普通の男の子が採用しだす。

30歳女性（会社員）

古いと非難されようが、時代錯誤と反論されようが、私はフェミ男なる存在を認めない。最近、店でピアスを耳に当て「似合う」なんて言っている二人連れの

男性を見かけ、ゾツとした。男のおしゃれにも限度がある。男らしく力強くあってほしい。

(読売新聞：1995年7月31日)

だが、この女性のように、好意的ではなかった者も少なくない。

カマカ!

(アクロス：1994年5月)

ゲイっぽい格好

(毎日新聞：1995年1月4日)

従来の、男の子のファッションから外れたフェミ男への批判は、少なくない。だが、批判の多くは、フェミ男とは異なる世代でおこなわれた。その内容は、男の子が女性物の衣服を着ることへの直接的な批判と、男の子がおしゃれに関心をもつことへの伝統的性役割に関する批判であった。そのため、フェミ男に対して否定的なメディアは、彼らを「カマ男」と表現することもあった。

1990年代初めにも、従来の男性像とは異なる男の子が出現した。

甘いもの好きで、サラダを食べ、雑貨が大好きで、まめでセンスもいい、心やさしき若い男

(現代用語の基礎知識：1991年)

彼らはギャル男とよばれていた（ここでは、2004年の「ギャル男」と区別して括弧なしのギャル男と表記する）。日本における、ギャル男ファッションの誕生ととってもいい。

「男らしさ」の既存概念から解き放たれた

(日経産業新聞：1990年2月21日)

センス発揮のチャンスと楽しむ男たちの台頭

(日本経済新聞：1990年3月14日)

1990年代に、「おやじギャル」とよばれたオフィス内で「オジサン化」するOLとの比較のなかで、ギャル男が取りあげられる。だからといって、ギャル男を「女性化」するビジネスマンと位置づけているわけではない。軟弱ではなく、既成の男らしさの概念から解放された身ざれいで、きちんと自己管理をする男の子として、ギャル男を位置づけている。

私の彼ときたら暴走族の頭のくせして絶対クルマいじりをしないのだ。どうして? と聞いてみたら「爪が汚れて黒くなんだろう。不潔じゃん」ときたもんだ。それでもツツパツてるから不思議だ

(女性自身：1990年7月3日)

ギャル男の評価は、男性には肯定的であった。だが、女性には否定的に受け止められる傾向にある。個性化・多様化がすすむなかでの新しいモラル、1990年代の消費の牽引者としてのギャル男への経済界の期待が、彼らの存在を肯定させていた。

ところで、このギャル男という言葉、『現代用語の基礎知識』に1990年に初めて掲載されて以降、1997年から2000年をのぞいて、2006年まで掲載され続けている。なぜ、1997年から2000年の4年間で欠如しているのかは不明である。だが、10年以上も「基礎知識」として死語とならず残っているということは、ギャル男が一過性の現象ではないことを物語っている。

『現代用語の基礎知識』を1990年から順にたどっていくと、あることに気づく。意味が変わっているのだ。もちろん言葉である以上、それは当然のことかもしれない。だが、その変わ

りようが大きい。

意味の変わるギャル男

1990年では、「女性化したやさしい男の子。甘いもの好きで、サラダを食べ、雑貨が大好きで、まめでセンスもいい、心やさしき若い男性」であったのが、1993年には「ファッションを語りプレゼントにセンスを発揮する女性的な男性」となり、2001年には「女っぽい容姿の男」、そしてついに2004年には「ちゃらちゃらしている男」となる。

初期のギャル男は、女性化・女性的とはいわれながらも、それはいわば内面的な部分に対してであった。甘いものが好き、野菜が好き、雑貨が好き、マめでセンスがあり、ファッションに関心がある。

決して外面的な部分は、従来の男性像から外れていなかった。だからこそ、他の男性からも肯定的に受け止められたのだろう。もしこれが、女性物の衣服を着て街を歩き、会社に出勤していたら、

その心配が、フェミ男としてあらわれた。

男の子にとっては、1970年代のクラブファッションであり、女装のつもりが全くなくても、明らかに女性物の衣服を着た、そして化粧をした男の子に対して、大人は批判的となった。

現実の1970年代にも、長髪でベルボトム・ジーンズというヒッピーな男の子がいた。その代表は、奇しくも武田真治と「武田」つながりの、武田鉄矢である。

武田鉄矢をはじめとする1970年代のヒッピーな男の子も、男のくせに女みたいな格好をするんじゃないと、大人から叱られていた。だが、武田鉄矢からは顔全体から男臭さが、あふれでていた。長髪が「女みたい」であっても、「女の格好」ではなかった。それに対して武田真治は、生まれもった細身の体や顔の小ささに加

え、体毛を剃り、化粧もする。女っぽい容姿に、女の格好をしていた。そこに、現実の1970年代ファッションとフェミ男に隔たりがある。だから、1970年代に青春を過ごした大人から、フェミ男は批判された。

ところで、男性が化粧をしたのは、このときがはじめてではない。

男性の化粧の歴史は古くからあった。ここでは詳しく論じないが、男性が化粧をするということが人々の意識から、近代以降は消えてしまう。しかし実際は、第2次世界大戦の戦慄が走るノモンハンでの戦いのなかでも陸軍の軍人は化粧をしていたし、大学紛争やベトナム反戦運動が盛りあがりを見せる頃では、学生達から「鬼の四機」とおそれられた警視庁第四機動隊の隊員も化粧品を使用していた。そして、いつのまにか男性化粧は、一部の芸能人だけのこととなってしまった。

その代表は、ジュリーこと沢田研二やYMOの坂本龍一らである。だが、彼らの派手な化粧はステージメイクであり、芸能人というハレの世界の住人がすることだった。一部の、芸能人だけがこのようなファッションをする。ケの世界の人間とは関係がない、特別なことである。

ミヨーな生き物、武田真治

(FOCUS: 1995年6月)

武田真治も芸能人であり、変わっているのだとしておけばいい。あくまでも、フェミ男は特別な世界のことだと。消費の主演として、センスがよくおしゃれに関心があり、身ぎれいで、きちんと自己管理をする。衣服も、女性物といっても、サイズの小さなTシャツやベルボトムのジーンズなど、衣服自体に男女の差が明確でないものならいい。ここまでなら、男らしさの既成概念からの解放だということにしておこう。

だが、女性と同じになってしまうと問題だ。フェミ男はごく少数の、変わった現象であって欲しい。大人たちは、そう考えた。

こんな風潮もコマーシャルイズムの産物だろう。若い男の子も被害者なのかもしれない

(読売新聞：1995年7月31日)

フェミ男が街に増えたのは、女の子に好意的に受け入れられ、それを通じて男の子のあいだでファッション性の高さが受け入れられたことが一因だ。その意味では、「コマーシャルイズムの影響」は小さくはない。しかし、彼らは被害者なのではなく、自ら意図的にフェミ男となっているのだ。

ファッションを考えた場合、それはどのようなファッションであれ、新しい服装の様式がまだ誰も採用していない時期にいち早く、何者かに採用されるところからはじまる。それは、新しい様式が既存の規範や価値基準に適合するかどうかについてはこだわらずに採用されるため、一般の人からは異端・逸脱としてみられることもある。しかしながら、次の段階に移行すると、その新しい様式は規範や価値と調整がおこなわれ、正当化される。

フェミ男をみた場合、初期採用者は武田真治である。彼は、自分の体形に合う衣服を選んだだけだ。しかし、男性が女性物の衣服を着るといふ、既存の規範や価値基準とは異なる行動であったため、様々に批判された。

しかし、女の子に受け入れられることを通じて、同世代の男の子に採用されはじめる。

おしゃれだからと服を選ぶ

(西日本新聞：1997年8月7日)

武田真治が自分のサイズにぴったり合う衣服

を着ていたことが、結果として男の子に肯定的に受け止められた。このときフェミ男は、フェミ男ファッションを採用した男の子の集団での、ファッションの規範や価値基準として共有された。しかし、それは女の子と同じ格好をするということではない。

なぜ、ギャル男は「ギャル男」になったのか？

さて、「ギャル男」であるセンターGUYを最初に取り上げたメディアは、雑誌『Men's Egg』であった。

「男のクセにレディース着てる！」ってコトで、本誌で取り上げたのが今年の夏。その頃のGUYは髪型もそこまで派手ではなく、化粧もしていなかった。見た目はギャルブランドに包まれているので、かなり目立った存在であった

(Men's Egg：2004年11月)

2000年頃からもみられた「ギャル男」であったが、2004年頃にその数を増やす。当初は、それほど派手ではなかった。ただ女性物の服を着ていただけで、口や目の周りだけ白くし、ワンポイントのキラキラしたシールをはりつけることもほとんどなかった。

「ギャル男」をセンターGUYと名付けた『Men's Egg』が、センターGUYである「しんのすけ」にインタビューをしている。

編集部 全身をギャルブランドで固めたキッカケを教えてよ

しんのすけ 今年の冬に付き合ってた彼女がアルバのコートを持って、外行く時に寒いからチョット借りたんよ。

で、鏡でたら、これを着たら目立ってイイかも!? って思った(笑)それからアルバの服にハマって

(Men's Egg : 2004年4月)

女の子の衣服を借りて着た。アルバローザとは、10代の女の子を対象として、明るい色にハイビスカスなどの花柄などを配置する南国風のファッションを提案するブランドである。男性物にはない生地の色や柄が、目立っていい。だから着たのだという。

編集部 これからセンターGUYを目指す人達にアドバイスをしようだい!

しんのすけ オレ的に、メイクはなしかな?っ思うんすよね。それやっちゃ〜、本当にギャルだし(笑)。まだシールはOKだけど、張りすぎはウザイ!

(Men's Egg : 2004年4月)

センターGUYの特徴でもある派手な化粧も、していない。化粧をすることで、本当にギャルになってしまうことを危惧している。だが、ある程度のシールは良いらしい。顔に張るシールは、化粧とは異なる装飾であるようだ。

女性物の服を着たきっかけは、とにかく目立つことにあった。

渋谷限定で目立ちたいってカンジ。“強め”のGUYがいると、もっと強くしちゃえて思います

(SPA! : 2004年12月)

渋谷や池袋といった街は、彼らにとって舞台

である。ケではなく、ハレである。だからこそ、目立つことが志向され、日常とは異なる「異端」なファッションも認められる。

一部の若者たちは常に目立ちたがり、平凡さを避けたルックスにあこがれてきた

(朝日新聞 : 2000年12月5日)

平凡さを避け、常に目立つファッションを志向したのは、今の若者だけではない。みゆき族しかり、竹の子族しかり。しかし、彼らにとって目立つということは何を意味するのか。

テレビに出てくるガングロのコギャルさんたちは、一人での行動は見かけられず、ペアかグループでつるんでの行動しかできないようです。人がするから自分もする。これじゃちっとも个性的には見えません

(朝日新聞 : 1999年10月27日)

ガングロの女の子へのコメントであるが、これは「ギャル男」にもあてはまる。彼らは、目立ちたいと主張するものの、一人では決して行動しない。目立つためなら、最大の奇抜な服装で、一人でいたほうがいいのにもかかわらず、たいていは集団で行動する。それも、同じようなファッションをして、むしろ、個人として目立つことからカモフラージュしているかのよう

一見傍若無人に見えるガングロですら、仲間から浮き上がらないようにしている

(朝日新聞 : 2004年9月10日)

村澤博人は、2002年4月19日の朝日新聞のなかで、ガングロが消滅した理由を、「自己表現ではなく、友人同士のつながりの意味しかもた

なくなった」と指摘した。友達がガングロになった。だから自分も同じようなガングロになって、仲間はずれにならないようにする、ということだ。

しかしどうだろう。むしろ、周りがするから同じような格好をする。周りが、「ギャル男」だから自分も「ギャル男」になる。これは、目立つということが、自分という人間に注目を集めることを意味しているのではない。個として、集団に同化することを志向している。それは、「仲間はずれになりたくない」という消極的な同化ではなく、「仲間を作りたい」という積極的な同化である。

ハッピーコミュニケーション

例えば、ユニフォーム。これは、集団の表象であり、集団の構成員であることを明示している。またユニフォームには、警察官や医師のように、それによって期待されている行動がある。警察官は市民を守ることを、医師は病気の人を助けることを期待される。そして、着用者は期待される行動をとるようにこころみる。

つまり「ギャル男」の場合、「ギャル男」というファッションがユニフォームとして機能し、同じ仲間であるという表象として、自分と同じ価値や行動を共有する者であることを明示している。

「センター街なら、知らないコでもGUYっただけで仲良くなれる。俺たちだって今日初対面だよな」竹馬の友の如く、仲良く語る2人が初対面だと聞き驚愕する取材班。どうやら同種内での連帯感は想像以上に強固である

(SPA! : 2004年12月)

同じ「ギャル男」であれば、見ず知らずの男

の子であっても、自分と同じ集団に属する者として関係が築きやすい。そして、それは男の子同士だけとは限らない。

男がこういう格好してると、彼女たちは『カワイイ!』って声かけてくれるから、すぐ友達になれる

(アエラ : 2004年6月7日)

ギャルとも、「ギャル男」は仲良くなりやすい。冒頭で、「ギャル男」とギャルのファッションの特徴をまとめた。「ギャル男」のファッションがギャルに似ていたこと、だから、男性版ヤマンバギャルとよぶメディアもあったことを確認した。そう、「ギャル男」とギャルのファッションは、ほとんど同じなのだ。だがそれは、ペア・ルックといったものとは異なる。

ペア・ルックとは、一般的に男女でおそろいの衣服を着ることである。同じ絵柄のT-シャツや色違いの同一デザインのパンツなど、男性物とも女性物ともいえない、いわばユニ・セックスな衣服を一緒に着ることである。そこには、相互で一緒の衣服を着ようという同意が存在する。しかしながら、「ギャル男」の場合は、ギャルのファッションを真似ているのである。

ギャルと同じファッション、つまり同じユニ



出典 : Men's Egg (2000.4.)

フォームを着ている。このことは、「ギャル男」がギャルと同じ集団に属し、価値を共有していることを意味している。だからこそ、男の子同士がそうであったように、「ギャル男」とギャルという異性間であっても、すぐ仲良くなれる。見ず知らずの初対面であっても、ギャルにとって「ギャル男」はすでに仲間なのだ。

- 春 菜 センターGUYたちの性格って
一体どんな性格？
- 夏 海 あ、それアタシもチョー知り
た〜い
- 春 菜 実はイイ人だったりするんだよ
ね
- 明日香 うん。見た目はコワイけど、性
格はカワイイ人が多いよ。一緒
にメイクしながら「ねえ、明日
香ちゃん！ ちょっとクシ貸し
て！」みたいな
(Men's Egg : 2004年3月)

同じ価値を共有する。このことについて、もう少し具体的に考えてみよう。

「ギャル男」が好んで着る衣服のブランドは、ギャルに人気のアルパローザであった。当然、女性物のブランドであるため、女の子も買いに行く。御用達のショップが男の子と女の子で同じこともある。

家に帰ると一緒にメイクアップを落とし
て、朝起きたら一緒にメイクアップ
(SPA ! : 2004年12月)

「この服、渋谷の〇〇で買ったんだ」「えー、私もよくいってるよ」という会話が、「ギャル男」とギャルのあいだで成立する。そして、サイズさえ合えば服の、またサイズに関係のない化粧品の「これ、かわいいね、貸してよ」「でしょ、

いいよ」という行動の共有が成立する。

バーン (Byrne, D.E. 1971 *The attraction paradigm*, New York : Academic Press) は、人は自分自身と類似していると知覚する他者に魅力をいただくことを示し、これを「類似性/魅力仮説」とよんだ。たしかに、英語で「誰かを好む (like)」ことと「よく似ている (alike)」は同じ語源である。

連帯感や相互の同一性は共有感覚から結果的に生じ、自分と類似する他者の前では、そうでない他者の前に比べて安心する。だからこそ、同じファッションをする若者たちが集う。ただ、ギャルとギャル男の場合は、類似している者が集まったというよりは、ギャルがギャル男を類似化させたのだが。

このファッションをするようになったのは、彼女がギャルだったんですよ。で、着て欲しいって言われて着るようになった

(Men's Egg : 2003年10月)

自分の好きなものに囲まれていたい。自分の好きな衣服は自分だけではなく、男の子にも着て欲しい。もはや、ギャルにとって「ギャル男」は仲間をこえて、自分自身そのものなのだ。そして「ギャル男」は、そんな女の子のリクエストに応じている。これを、「女の子による男の子のマスコット化現象」とよぼう。

羊の皮をかぶった「ギャル男」

ギャルにとって、「ギャル男」は、自分自身だ。女の子と同じであり、かわいく、おしゃれなのだ。だから声をかけやすいのだし、「ギャル男」と仲良くなりたい。

しかし、ただ「仲良くなりたい」と思っているのは、女の子だけだ。

ギャルと同じファッションをする。最初は、ただ単純に男性のなかで目立つという意味しかなかった。しかし、同じようなファッションの男の子が増えてくるにつれ、目立つことが目立たないこと、すなわち個から集団への表象となる。それは、同性のあいだだけではなく、異性とのあいだにおいても作用する。

女の子が「かわいい」と、男の子に声をかける。初対面でも、すでに仲間なのだ。男の子と女の子のファッションが近ければ近いほど、その力は強くなる。

たね男 最近、俺らみたいなセンターGUYファッション確実に増えてきたよな

シュガー ぶっちゃけ、このカッコウしていればみんなとスグに仲良くなれる利点があるんだよね

ひろたね ギャルと仲良くできればOKですからね

(Men's Egg : 2004年3月)

ファッション性に関して、人は自分と似たような衣服を着た人に心が惹かれる (Pinaire-Reed, J.A. 1929 Interpersonal attraction : Fissionability and perceived similarity, *Perceptual and Motor Skills*, 48(2), 571-576)。男の子は、そのことを知っている。意識的か、無意識的かは別にして、ギャルと仲良くなりたい。そのために、ギャルと同じファッションをする。

初めのころ、「ギャル男」が、ギャルブランドの衣服を着て化粧をしていない、化粧をすることで本当にギャルになってしまうことを危惧していたにもかかわらず、いつのまにか化粧をし、ギャルになってしまった。

いつろう ま、どっちかだろうね～(笑)。オレらこんな格好だ

から、ギャルかマンバとしかヤレねえYOッ!

ともにゃん だね。他の女とは縁がない(笑)

やあくん B-BOYなんかはギャルと付き合ったりするけど、センターGUYがB-GIRLと付き合うコトってないよな

いつろう あと、普通の白い肌のコと出会う機会もないね(笑) ウォ～ッ! カゴちゃんみたいなのと、たまにはやりたひ…

ともにゃん とりあえず、普通のコとやりたいなら、その格好をやめるべき(笑)

いつろう たしかに、けどやめたらギャルやマンバにモテないしにや。まさに究極の選択!(Men's Egg : 2004年10月)

「ギャル男」だと、ギャルとしか仲良くなれないことを彼らは知っている。違うタイプの女の子と仲良くなるためには「ギャル男」ではダメなのだ。にもかかわらず、「ギャル男」でいる。それは、ギャルに近づくためにほかならない。

羊の皮をかぶった狼、外見は非常におとなしいが本性はその逆の場合を例えるときに使うが、「ギャル男」がまさしく羊の皮をかぶった狼である。まあ、本当に動物の着ぐるみを着てしまった男の子もいたのだが、それについては、別の機会でも論じてみたい。

ところで、2003年に平松隆円らが、化粧をおこなう男の子について社会心理学的な研究をしている(化粧に関する研究(第2報)―大学生の化粧関心・化粧行動・異性への化粧期待と個人差要因―『繊維製品消費科学: 44(11)』)。それによると、化粧をよくおこなう男の子は、

性役割としての男らしさが高いこと、すなわち男らしいということが明らかにされた。この調査は、直接「ギャル男」に関するものではないものの、化粧と男らしさの関係を明らかにしていることから、「ギャル男」の化粧も男らしさが関係していると考えられる。ということは、女の子に近づきたいというマッチョな「男らしい」欲望が、男の子に化粧をさせているといえる。

欲望にかたちを与える

なぜ「ギャル男」は、そこまでするのか。

それは、男の子の劣情がなせる技なのだ、といってしまうえば簡単だ。だが、「ギャル男」が登場するまで、日本文化のなかで男の子が意識して女の子と同じファッションをしたことはなかった。

フェミ男も、女の子の衣服を着ていた。一部の芸能人のファッションを、女の子が好意的に受け入れたのを機に同世代の男の子が女の子の衣服を着た。周囲の大人は彼らを女装・女性化と批評していたものの、男の子自身は女の子と同じファッションをするという意図をもっていなかった。彼らは、衣服のサイズやしたいファッションに男性物がないための女性物を採用したのであり、女の子と同じファッションをすることではなかった。同世代の女の子たちも、また、彼らが女の子のファッションをしているとは認識していない。

だが、「ギャル男」は自分たちがギャルと同じファッションであることを認めている。男の子だけではなく、女の子も同様に認めている。いやそれだけではなく、男の子が自分たちと同じファッションをし、価値や行動を共有していることを、女の子自身が楽しんでいる。

男の子は着たい衣服を着ているのではなく、女の子が好きな衣服を着させられている。しか

も、男の子は嫌がることなく、むしろ女の子と仲良くなれるのであればと、すすんで着ている。それはただ、女の子に気に入られようと女の子の好みに合わせているのではない。女の子と仲良くするため、積極的にファッションや化粧を模倣したことが、「ギャル男」という一つの形としてあらわれた。

フェミ男や「ギャル男」は、女の子が好意的に受け入れたために、女物の衣服を着たことは共通している。フェミ男にとって、それはファッション性が認められたために女物の衣服を着たにすぎない。もちろん、女の子が好意的に受け止めたからという意味では、女の子にもてたい、カッコイイと思われたいなど、女の子と仲良くなりたいから、女の子の衣服を着たのだろう。

だが、フェミ男はまだ気づいていなかった。女の子と同じファッションをすることが女の子と仲良くなる戦略であることを、いや、まだ時代がそれを許していなかったのかもしれない。女の子と同じファッションをすることではなく、ファッション性の高さを追求した結果、女の子の服しかなかったということで、おしゃれだという要素が、女の子と仲良くなる方法だったのだ。

しかし、「ギャル男」の場合はファッション性の高さではなく、女の子に近づくために女物の服を着た。彼らは、女の子と同じファッションをすることが、女の子と仲良くなる戦略であることを認め、実行したのだ。

「ギャル男」は、わずか1年足らずで街から消えた。地方都市では、2005年以降もみられたものの、渋谷を中心とするギャル男は、2004年のうちに「ギャル男」でなくなり、ギャルと同じファッションをする男の子はいなくなった。

どこにいったのか。テレビや雑誌によると、彼女たちは今話題の「セレブファッション」に変わったそうです。気張りす

ぎず適度に着崩した、魅力的な大人の女性へと変わってしまったのです

(2005年3月7日：朝日新聞)

街に、ガングロの女の子がいなくなった。彼女たちは、ガングロからセレブファッションの「お姉系」にかわったのだ。それによって、「ギャル男」も「お兄系」となっていく。

コンサバに、セレブを模倣して色気がある華やかなファッションが「お姉系」である。その男性版として、ド派手なベルトバックルにネックレス、光沢感あるイタリアンブーツやデニムにサングラスという風貌の「お兄系」があらわれた。「お姉系」の女の子は、付き合う男の子のファッションを、自分たちと同じセレブ系に求めたのだ。そして、男の子たちもそれに就いていった。だが、それは「お姉系」の男性版であり、「お姉系」の衣服を男の子たちが着たわけではない。

女の子と全く同じファッションをした男の子は、「ギャル男」が最初で最後である。だが、同じ服ではないにしろ、「お兄系」も「ギャル男」と同様に、女の子と同じファッションをすることが、女の子と仲良くなる戦略として実行した結果だ。

自分自身のフィギュアとして、男の子をつれて歩く女の子。はたして彼女たちは、女の子と同じ姿の羊に隠された男の子の、狼の顔に気づいているのだろうか。

付記

本論は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国際日本文化研究センター共同研究「性欲の文化史」(代表者:井上章一)における報告書をもとに、加筆したものである。